

研究題目

人とかかわり合いを大切にし、思いを高めることができる児童の育成
～コミュニケーションスキルの活用を通して～

研究要項

1 研究のねらい

本校では、E S Dを継続して行っており、総合的な学習部会での発表は、本年度で5年目となる。E S Dとは、「持続可能な開発のための教育」と訳され、「持続可能な社会の担い手を育む教育」と言える。

発表1年目は、「かかわる・つたえる・つながる」のキーワードをもとに、地域の人材や教材に目を向け、1年間の総合的な学習の時間を見通したE S Dカレンダー・年間指導計画を立て、E S D活動の基礎をつくった。2年目は、子どもが主体的にE S Dに取り組めるよう話し合い活動に重点を置き、K J法やシンキングツールを用いて、出された意見を誰もが構造的に分かるように工夫した。3年目は、これまで行動面に重点を置きがちであった取組を見直し、思いやりや郷土愛をテーマとした題材を道徳で取り扱い、E S Dとの連携を図りながらさらなる活動の充実を図った。4年目は、児童が話し合い活動の中で、別の視点から問題について考えたり、他の児童の意見を聞いたりして、新しい考え方や見方を再発見し合う場面を、「高め合い」として設定し、研究を進めてきた。そして、本年度は、コミュニケーションスキルの活用に焦点を当てていきたい。本校のE S Dは、人権教育を大きな柱として展開されており、今までも人権教育や話し合いの「傾聴」という場面で、コミュニケーションスキルは育てられてきた。しかし、ややもすると今まで行われてきた人権教育という枠組みの中で捉えられ、それがE S Dにおいてうまく機能してきたとは言い難い。そこで、本年度はこの部分の改善を図り、人権教育を柱とした本校独自のE S Dをもう一度見直したいと考える。人権教育とE S Dの連携をより強化し、コミュニケーションスキルの活用を通して、人とかかわり合いを大切にしたいE S Dに生かせるよう見直しを図っていきたい。

本研究の対象となる5年生は、ふるさと甚目寺の産業に目を向けてE S Dの取組を行い、ふるさと甚目寺の様々な方とふれあう機会がある。甚目寺に古くから伝わる刷毛作りの継承者、甚目寺を拠点に活動の幅を広げている企業の方、5年生が来店予定の甚目寺観音てづくり朝市にお客さんとして来てくださる地域の方々などである。その際に、国語科と連携を図りながら、取材におけるインタビューの仕方やコミュニケーションのとり方などを習得させ、E S Dの中で活用していきたい。

また、今までと同様、学級や学年の仲間と協力して取り組むための人間関係づくりも重視し、よりよい人間関係を育むためのコミュニケーションスキルの習得もあわせて行っていきたい。

2 研究仮説と方法

(1) 研究仮説

目指す児童像を次のように掲げ、研究のねらいをもとに研究仮説を設定した。

目指す児童像

- I 地域の産業に興味をもち、自ら考え、主体的にかかわる児童
- II 人の気持ちや思いに気づき、地域の将来のためによりよく行動できる児童



研究仮説

仮説Ⅰ 国語科で学習する敬語の使い方やインタビューの仕方を生かし、地域の産業を支える人とかかわることで、今までよりも一層主体的に地域の人々とかかわろうとするであろう。

仮説Ⅱ 道徳で郷土の産業に携わる人々の思いにふれる学習を充実させ、特別活動の時間に互いの行動や存在を認める場面を設定することで、よりよい人間関係のつくり方を学び、学級や学年で協力してふるさと甚目寺に貢献するための行動をとることができるであろう。

(2) 研究方法

① 仮説Ⅰに対しての手だて

- ア 地場産業である刷毛作りについての出前授業を行い、地域の産業に興味関心をもつ。
- イ 国語科と連携し、甚目寺小にある聞く・話す・話し合いの能力表と学習スキルを見直し、インタビューの仕方やあいさつ、敬語などのコミュニケーションスキルの定着を図る。
- ウ 地域の企業やお店、農家の方に直接会い、仕事をする様子を見学したり、インタビューを行ったりして、地域の産業への興味関心を高める。

② 仮説Ⅱに対しての手だて

- ア 互いを認め合う姿勢を育てるために、友達の行動をよく観察し、「ほめ言葉のシャワー」を行う。
- イ 野外活動の事前学習として、みんなが協力してよりよい野外活動にするためには、思いを行動に移すことが大切であることを、道徳の授業を通して伝える。
- ウ 道徳と連携し、甚目寺に刷毛を広めた山崎政三郎さんの苦勞とふるさとに対する思いにふれる。

3 研究計画（5年生の計画）

(1) 年間カリキュラムの見直し【別紙資料1・2】

(2) 通年 特別活動「ほめ言葉のシャワー」

- 5月 道徳「気持ちをカタチに」
- 6月 総合「刷毛の出前授業」
道徳「後世に伝える 伝統の業」
- 7月 国語「きいて きいて きいてみよう」
- 夏休み 総合「取材活動」
- 9月 総合「ミニ発表会」
- 11月 総合「総合学習発表会」
- 2月 総合「てづくり朝市」

4 実践内容（5年生の実践）

(1) 特別活動「ほめ言葉のシャワー」・・・仮説Ⅱに対しての手だてア

5年生は、毎日1人の主役児童を決め、その児童のがんばっていたところやよかったところを観察し、帰りの会で全員が発表する「ほめ言葉のシャワー」という取組を行っている【資料1】。この取組は、学年目標「認め合う仲間」のもと、互いの個性や存在を認め合い、だれとでもよりよい人間関係を築くことができるようになることを目標としている。主役となった児童は、全員の前でその日の目標を述べ、一日を過ごすのであるが、普段の生活とは違い、自分の目標に向かって努力したり、いつも以上にしっかりと責任をもって役割を果たしたりしている。例えば、「今日は、先生の話をよく聞き、すばやく行動します」や「そうじの時間、いつもはできないところまでやれるようがんばります」など具体的な目標を述べる。それ以外の児童は、その主役児童が述べた目標を参考に、休み時間に友達と仲良く遊ぶ姿や高学年として委員会の仕事を立派に行う姿、授業中にながらんでいる様子、帰りの会にてきぱきと帰りの準備をする様子など細かいところまで観察している。そして、帰りの会のほめ言葉タイムでは、自分の一番伝えたいことを主役児童に伝える。さらに、互いの発表をきき合うことで、主役児童の新たなよい一面を見つけたり、発表する児童の相手に伝わりやすい発表の仕方を知ったりして、次の日の「ほめ言葉のシャワー」に生かしている【資料2】。主役児童は、友達からかけてもらった温かい言葉にじっくりと耳を傾け、とても素敵な笑顔でお礼を言っている。

このように、「ほめ言葉のシャワー」を通して、主役児童に対する周りからの温かい言葉がけが自信となり、自分という存在は周りから認められているのだという自己肯定感にもつながっている。また、自分以外の友達の発表を聞くことにより、自分の気づかなかった友達のよい一面を知ったり、どんな発表の仕方が相手により気持ちよく伝わったりするか、など総合的な学習のインタビューとも関連のある「話す・きく」姿

勢にもつながっていると考える。今後は、「ほめ言葉のシャワー」を通して、主役児童のよいところを観察する力を育てていきたい。

(参考 「ほめ言葉のシャワー」とは、教諭菊池省三先生が行っている取り組みである。)

今日、 さんは、算数の時間に、問題を集中して、あきらめないうちでいました。集中力とあきらめないうちがあると思いました。ほくも さんを見習いたいです。

【資料1 主役児童の子へのほめ言葉】

(名前 くん)

相手の目をしっかりと見て、伝えたいことをはっきりさせながら大きな声でいって、1分ですばらしいと思いました。

【資料2 発表する児童のよいところを見つける】

(2) 道徳の授業「気持ちをカタチに」・・・仮説Ⅱに対しての手だてイ

ESD活動では、グループで協力し、助け合い、1つのことを成し遂げるという機会が多い。そのため、相手を思いやる心(思いやり)を育てたいと考え、この授業を設定した。

授業では、ACジャパンの宣伝広告を用いて、写真を部分的に見せ、□の中にはどんな言葉が入るか、グループで話し合いながら考えさせた【資料3】。この授業を通して、自分の中で相手に対して思っていることや考えていることは行動に表さなければ相手に伝わりにくいということ、だからこそ行動に移すことがとても大事であるということを知ったようだった。児童のふり返りには、「自分の気持ちは、行動をしないと、意味はない。ということと思いました。気持ちは、カタチにしてこそ意味があるんだと思いました」や「私にとって『思い』は人に対する気持ちなどで、『思いやり』は、その思った事を行動するという事かなと思います。どっちかというと、思うことより行動にうつしたほうがいいかなと思います」といったことが書かれていた【資料4・5】。



【資料3 ACジャパンの宣伝広告】

授業の最後には、野外活動が間近に控えていたため、友達が困っていたり、悩んでいたりしたら、今回の授業で学んだことを生かし、積極的に助ける姿勢を大切にしようということをおさえた。また、今後の総合的な学習の取組においても、分からないことがあれば聞いたり、もう少し深く知りたいということがあればさらに質問をしたりするなど、心の中だけで思っているのではなく、積極的に行動に移していくことが大切であると伝えた。

今日の「気持ちをカタチに」授業では、自分の気持ちは、行動をしないと意味はない。ということと思いました。
気持ちは、カタチにしてこそ意味があるんだと思いました。そして、今自分は、

【資料4 児童Aのふり返り】

私にとって『思い』
は人に対する気持ちなどで、『思いやり』はその思った事を行動するという事かなと思います。
どっちかというと、思うことより行動にうつしたほうがいいかなと思います。

【資料5 児童Bのふり返り】

(3) 総合的な学習「刷毛の出前授業」・・・仮説Ⅰに対しての手だてア

5年生の総合学習「われら産業調査隊」の活動のスタートとして、甚目寺の地場産業である刷毛の学習から始めた。刷毛組合の方に出前授業を行っていただく前に、児童らに刷毛のことについて聞いてみると、「甚目寺が刷毛で有名なことは知っている」という児童から、「甚目寺では、刷毛が有名であるということさえ全然知らなかった」という児童まで、刷毛に対する知識量に差があるというのが現状であった。

出前授業では、刷毛作りを始めた山崎政三郎さんの業績や刷毛の種類、刷毛作りの工程などをとても丁寧に教えていただいた【写真①】。一言で刷毛を作ると言っても、刷毛の種類は大変多く、「一人前の刷毛職人になるには何年、何十年と経験を重ねなければならない」という貴重な話や「最近是中国からとても安い製品が入ってきており、日本の刷毛は売れ行きがよくない」「後継者が大変少なく、この甚目寺に伝わってきた刷毛作りが途絶えてしまわないかこの先が心配だ」という切実な話も聞くことができた。出前授業の最後には、刷毛の原料となる山羊や羊、馬の毛をさわらせていただき、児童にとっても刷毛というものがとても身近になった【写真②】。

また、児童のふり返しには、「年々少なくなっている刷毛の会社を維持するにはどうしたらよいか」「甚目寺の産業についてもっと知りたい」「校区内にある工場はどのようなものをつくっているのか」などと書かれており、今回の刷毛の出前授業を通して甚目寺の産業に対する児童の意欲を高めることができた。



【写真① 出前授業の様子】



【写真② 動物の毛をさわる】

(4) 道徳の授業「後世に伝える 伝統の業」…仮説Ⅱに対しての手だてウ

刷毛の出前授業を通して、甚目寺に刷毛を伝えた山崎政三郎さんの存在や甚目寺は刷毛作りが盛んであること、いろいろな刷毛の種類を作っていること、甚目寺にしかない刷毛を作っていること、後継者不足に悩んでいることなどを知ることができた。しかし、甚目寺で刷毛作りが盛んになった理由や、刷毛作りを伝えた山崎政三郎さんの思いにまで目を向けた児童の感想は見られなかった。そこで、今から 100 年前、山崎政三郎さんがどのような思いで刷毛作りを習得し、甚目寺に伝えたのか、山崎政三郎さんの立場になって改めて考えさせたいと思い、この道徳の授業を設定した【写真③】。

授業の前半部分では、刷毛作りに対する山崎政三郎さんの思いについて考えさせた。児童からは、甚目寺の刷毛を「有名にしたい」「多くの人に伝えたい」「次世代にも広めてほしい」「いろいろな人に使ってほしい」などの意見が出た。授業の後半部分では、現在刷毛組合会長の小関さんからのビデオメッセージを流し、現在刷毛作りを行っている人々の思いを考えさせ、グループで話し合わせた【写真④】。児童からは、「甚目寺の刷毛作りを進歩させたい」「刷毛作りの跡継ぎになってくれる人を増やしたい」「後世の人に伝え、昔のように盛んになってほしい」という意見が聞かれた。山崎政三郎さんから始まった刷毛作りが 100 年もの年月を経て、ふるさと甚目寺に今でも受け継がれているすばらしさに気づくとともに、その背景にある職人さんの思いにも迫ることができた。刷毛に対する「思い」が脈々と受け継がれていることに重点を置いて授業を行ったことで、その技術を受け継いだ人の思いにも目を向けることが重要であると児童らは気づいたようである。この授業を通して、技術の継承だけでなく、思いの継承にも目を向け、その思いを大切にする姿勢を育てることができたのではないかと考える。



【写真③ 山崎さんの思いについて考える】

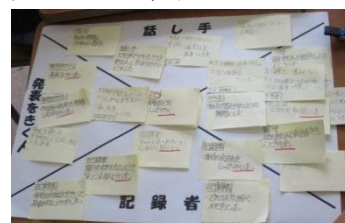


【写真④ 現在刷毛作りを行っている人々の思いについて話し合う】

(5) 国語科の授業「きいて きいて きいてみよう」…仮説Ⅰに対しての手だてイ

本単元は、友達にインタビューを行い、友達のことについてさらに知ろうという単元である。(6 時間完了) この単元で身につけたコミュニケーションスキルは、夏休みに行く取材活動に大いに生かすことができると考え、夏休みに入る直前に実施した。第 1 時は、「きく」という動作について、考えさせた。「人の話をきく」「音楽をきく」「道をきく」といった同じ「きく」でも動作が違えば、気をつけるべきことも異なってくるという学習をした。第 2 時では、例文をもとに、きき手・話し手・記録者の三人に分かれ、役割を交代しながら実際にインタビューの練習をした。その後、インタビューをするときには、どのようなことに気を

つけたらよいか考えさせた。第3時では、インタビューのグループ分けを行い、インタビューする質問の内容を考えさせた。インタビューする児童は、相手がどのようなことに興味をもっているのか、どのような習い事をしているのかなど、頭を悩ませながら質問を考えていた。その後、質問の順番について検討させ、あらかじめ順番は決めておくが、相手の答えや話の流れによって順番を変えてもよいことや、相手の答えを聞いてさらに新しい質問を付け加えてもよいことを伝えた。第4時では、実際に3人グループになり、役割を交代しながらインタビューを行った。最初に、それぞれの役割の注意事項を確認した上で、各グループが活動に入った。多くの児童が、気をつけるとよいことを意識しながら、インタビューをすることができていた。第5時では、自分が記録をした友達のインタビュー内容について報告をした。2つのグループを合体して行ったので、他のグループの友達についても詳しく知ることができた。第6時では、第1～5時までの活動をふまえ、「きく」ということについて整理し、まとめた。初めに、インタビューをした際に気をつけたことやインタビュー内容の報告を聞いている際に気をつけたことを付箋紙に書き、グループごとにXチャートに分類させた【写真⑤】。そして、話し合いを進めていく中で、同じ言葉や似ている言葉に着目し、各グループで出た意見を短冊に書かせ、黒板に拡大Xチャートを完成させた【写真⑥】。そのチャートの中でも、学級全体で改めて同じ言葉や似ている言葉を発表させたところ、「相手」「目を見る」「うなずく」という言葉が出てきた。「きく」という行為については、必ず相手がいて、相手のことをもっと知りたいという意欲をもってインタビューに臨むことが大切であるということをおさえた。



【写真⑤】 付箋紙に気をつけたことを書いて貼ったXチャート】



【写真⑥】 黒板に貼った拡大Xチャート】

総合学習で取り組む夏休みの取材活動では、礼儀正しく、相手のことを意識しながら、取材活動に臨むことが大切であることを再確認した。

(6) 総合的な学習・地域産業についての取材活動…仮説Ⅰに対しての手だてウ

5月の下旬に、オリエンテーションを行い、甚目寺地区の産業についての学習会を行った。そして、インターネットを使い、自分の興味のある店や工場について調べ学習を行った。その後、興味をもった店や工場が同じ児童らで集まり、どんなことについて調べたを話し合い、学級全体で発表をした。互いの発表を聞く中で、調べられなかったことやもっと詳しく知りたいことについて、児童から実際にお店や工場に行き、働く人に直接インタビューをしたらどうかという意見があがった。そこで、「われら産業調査隊」の取材活動として、夏休みに入ってから8月の下旬までの間に行うこととした。質問を考える際にあたっては、「このお店ができて何年目ですか」という歴史に関する質問から、「商品をどんな思いで作っていますか」など人の思いに関する質問までインターネットでは調べられないことを中心に考えていた。取材先では、商品の作り方、製造している部品などを見せていただき、疑問に思っていることやさらに知りたいことをインタビューする児童が多く見られた【写真⑦】。また、龍鳳堂（線香屋）に取材に行った児童の中には、「お店はいつからやっているのですか」という質問をし、お店の方が「江戸時代からだよ」とおっしゃると、非常に驚くとともに、「そのころから関係のある場所がありますか」とさらに質問をした。この姿勢から、国語科の授業で学習したように、もっと知りたいということが出てきたら、相手の人にさらに質問をして自分の理解を深めようとする姿を見ることができた。また、授業の中で相手の話をきくときに気をつけることとして挙げた「目を見ること」、「うなずくこと」などの具体的な行動も取材活動において見ることができた。【写真⑧】このことから、実際に友達同士で行ったインタビューを通して、「きく」時に気をつけなければならないことを身をもって体験したことで、総合的な学習の取材活動の中におい



【写真⑦】 刷毛の作り方を見学】



【写真⑧】 相手の目を見て話をきく】

でも生かすことができ、総合的な学習と国語科との連携は、大変有効であったのではないかと考える。

5 成果と課題

(1) 成果

①仮説Ⅰへの取組について

国語科「きいて きいて きいてみよう」や「敬語」の授業で学習したことを生かし、取材活動では、相手の答えや表情を見ながら質問を変えたり、その場で考え、聞き返したりすることができた児童もいた。夏休みの取材活動を通して、ふるさと甚目寺にこれほど誇れる店や工場があることを身をもって実感することができ、今後の総合的な学習の取組みに対する意欲もより一層高まったようであった。

②仮説Ⅱへの取組について

1学期の初めに行った「気持ちをカタチに」という授業や、毎日帰りの会で行っているほめ言葉のシャワーの成果として、相手の立場に立って物事を考えたり、友達の存在を認める姿勢が少しずつ育ってきているように思う。6月に行われた甚小まつりの後には、友達のよかったところやがんばっていたところを付箋紙に書いて本人に渡そうという取組みを行ったところ、友達の一生懸命頑張る姿やさりげない心遣いに気づくことができていた。今後も継続して行い、総合的な学習の発表や取組みの中で生かしていきたい。また、刷毛の出前授業や道徳「後世に伝える伝統の業」では、山崎政三郎さんの苦労や当時の様子を想像することにより、どのような思いで刷毛作りを甚目寺に伝えたのかという山崎政三郎さんの思いにふれることができた。

(2) 課題

- ・ 夏休みの取材において、質問をした後、相手の方から返ってきた答えをきき、答えの中で自分が分からないことやさらにききたいことを瞬時に判断することができず、切り返して質問したりすることが大変難しい。
- ・ 甚目寺の産業について興味をもって調べたり、質問したりすることはできたが、それらを踏まえた上で、地域の将来のために行動するということがまだ不十分であるので、今後の取組みの中で実践を行っていききたい。

6 2・3学期の取組について

(1) 総合的な学習の時間「取材をして分かったことをもとにミニ発表会をしよう②」

1回目の取材活動を経て、実際に働く人にインタビューすることで、インターネットでは調べられなかった「人の思い」などを聞くことができた。それらをもとに各グループで話し合い、今回の取材で聞いてきたことや分かったことを発表する。その中で、他のグループの調べた内容の中で、「この部分はどうなっているのだろうか」という疑問など自分たちの目線からは気がつかなかったことを他のグループから指摘してもらおう。そして、もう一度インターネットを使って調べ直したり、場合によってはもう一度電話で連絡をとり、取材先を訪問させていただく予定である。

(2) 総合学習発表会

毎年11月に、総合学習発表会がある。これまでに自分たちが調べてきた店や工場のことについてグループで協力してまとめ、発表をする。インターネットで調べたことをはじめ、実際に取材に行き分かったことを交えながら、保護者や地域の方々にふるさと甚目寺の産業のすばらしさを伝える。当日は、取材にもご協力いただいた店や工場の方々も招待し、来ていただく予定である。

(3) 地域産業を盛り上げる

本校のすぐ隣の甚目寺観音では、毎月12日に「甚目寺観音づくり朝市」が行われる。本校の5年生は、毎年2月にお店を出店しているが、今年度2月12日は休日のため、場所を変えて、甚目寺小学校内で行う予定である。朝市では、小松菜農家や方領大根農家の方に作り方を教えていただき、自分たちの手で育てた小松菜や方領大根、本校の中庭で実ったレモンやきんかんなどを販売する。また、産業について自分たちが調べてきたことを宣伝し、地域の方々との「かかわり合い」ができる機会を設けていきたいと考えている。